

「仰げば、光あり」

横田南嶺

皆さん、こんにちほ。大勢の皆さんにお集まりをいただきまして、まことにありがとうございます。

私は普段、お寺におるものですから、世間のことに疎いところがございます。今日もお寺から電車でまいりました、休日のダイヤヤなんですね。どうして今日は休日なのだろうか、と思いましたが、海の日だということですね。暑い日でございますので、海に行く方々も多いのだらうと思えます。今日はそんな中をこうして、わざわざお集まりをいただき、本当にありがたいことだと思っております。

最近、こんな絵を見ることがございました。三人の聖人、お年を召した聖人が、お酢の入った大きな甕の周りに集まっている絵であります。三人の聖人は一緒に甕の中のお酢を舐めています。お酢でありますから、三人とも実に何ともいえない酸っぱいという顔をしている。その三人の聖人というのは誰を描いたのかといいますが、一人は中国の孔子であります。『論語』で有名な孔子。もう一人は老子、老荘思想の老子であります。もう一人は仏教のお釈迦さま。孔子と老子とお釈迦さまの三人がお酢を舐めた。すると、三人とも、「酸っぱかった」。こういう絵なのであります。「面白い絵ですね。人間は一つだということを言わんとしているのではありません。」

ただ、問題が「酸っぱいな」で終わればいいのですけれども、さまざまな違いや物事が分かれてくるのは、その「酸っぱいな」、というところの後であります。「酸っぱいのは嫌だ」という考えの人もいるでしょうし、「いや、酸っぱいのは健康に大変いいんだ」という人もありますし、中には「この酢は本物の酢ではない、本場に醸造したものではない。沖繩の甕で作った酢じゃないと駄目だ」、なんていうような健康食品に詳しい人も出てくるかもしれません。そこから、さまざまに考え方が分かれてくるのであろうと思います。今日も、色々な立場の方、色々な教えを学ばれている方が、いらっしやっているとと思います。お若い学生さんもいらっしやれば、社会でお勤めになっている方もいらっしやると思います。しかしお酢を舐めれば皆さん同じように「酸っぱい」と感じるんだらうと思うのでございます。

それと同じように、今日であれば、空調の整ったこの立派なホールから一歩外に出ますと、皆一様に「暑いなあ」と感じるのだらうと思います。「今日は暑いですね」「そうですね」、これで終われば何も問題はないのであります。今日の話もこれで終わっていいと思います。本当のところはそうなのだろうと思うのですけれども、そういうどんな人であらうと、お若い方であらうと、ご年配の方であらうと、あるいはどんな考え方、教えを学んでいる人であらうと、皆さんに共通するような人間としての生き方について、仏教詩人といわれる坂村真民という人の詩を紹介しながら、今日は少しお話をさせていただきます。

その話の前に一つ、こういう俳句を紹介したいと思います。「猿跳んで 一枝青し 峯の松」。ご年配の方で存知の方もいらっしやるとは思いますが、この俳句が一体何を詠っているのか、お若い皆さん方に少し考えてみてもらいたいと思います。「猿跳んで 一枝青し 峯の松」。私も未熟でございまして、初めてこの句を聴いた時には、

いかにも大したことのない凡庸な句のように思えました。出てくるのは峯の松、松の枝と猿だけであります。猿が松の枝からぴよんと飛び跳ねたのでありましょうか。その松の枝が青い。それが一体、何だというのだという気持ちでおりました。

そこで、皆さん方も頭の中に大きな画用紙を用意していただきまして、この俳句で思い浮かぶ景色を少し描いてもらいたいと思います。そんなに難しいことではありません。松の枝と猿であります。できれば、松の枝と猿を小さめに、右の下でも左の下でもいいのですが、あまり大きく描かず、少し小さめに描いて、想像してみてもいい。およそ上手下手の差はあっても、今、皆さん方の頭の中には、白い大きな画用紙があって、その片隅に松の枝がありそこで猿がぴよんと飛び跳ねているものと思います。そこで、皆さんに伺います。この絵は何を表しているのでしょうか。

松の枝と猿を描けと言ったのですから、当然松の枝と猿でしょうと思うかもしれませんが、実はこの句は松の枝を詠った句でもなく、猿を詠った句でもありません。皆さんが今、思い浮かべている画用紙の、最も広いところ、そこに一体何が描かれていますか。何にも描かれていない真っ白いところ、それは雪なのです。これは雪を詠った俳句なのです。雪という言葉を一文字も使わずに、満面の真っ白い雪景色を表しているのです。そのなかで、猿が一匹ぽつと松の枝から飛び跳ねたので、その松の枝の青い色が目に見えた。言わんとしているのは、一面の空白です。そこに雪が描かれているという句なのであります。実に味わいが深いといえますか、空間や余白、何もないと見えているところに大きなもの、大切なものが表れているのです。

「仰げば、光あり」

深い句であると思います。我々は普通ですと猿が飛んだこと、あるいは松の一枝だけが目に触れ、そこだけに

目がいつてしまおうのですが、これで言わんとしているところは、その一部ではなく、その周りの広いところ、空間余白に満ちあふれているものなのです。雪の景色を思い浮かべてみて、少し涼しくなったのではないでしょうか。そんなことを最初に申しあげておいて、お話を進めてまいりたいと思います。

こういう話を聞いたことがあるかもしれません。思考、思い考えること。思うこと、考えることについての言葉です。「思考に気を付けなさい。それはいつか言葉になる。言葉に気を付けなさい。それはいつか行動になる。行動に気を付けなさい。それはいつか習慣になる。習慣に気を付けなさい。習慣はやがて性格になる。性格に気を付けなさい。それはやがて運命になる」という言葉です。マザー・テレサさんも引用なさったり、あるいはインドのガンジーさんも引用なさったりしています。最初の出典がどこにあるのかは、私もはっきりと存じ上げないのですが、なるほど上手に表現をしていると思います。

私達が何を考えているのか、その考えていることが言葉になって表れます。言葉にしていることは、やがてそのように行動するようになっていき、行動することが習慣になっていく、そして習慣がその人の性格をつくっていく。その性格によって、それぞれの人の運命、更にもっと大きく言えば、この国や世界がつけられていくといつてもいいのではないかと思うのです。これは、我々仏教のお釈迦さまも同じようなことを言われているのです。「思いこそ全ての元である。全ては思いによって成り立つ。清らかな思いで、ものを語り、行えば、その人には楽しみが付きまとう。逆に、邪な思いで、ものを語り、行うことをすれば、その人には苦しみが付きまとう」と。お釈迦さまの言われたこの言葉は、なるほど真理であろうと思います。思いというもの、私達がどう思っているか、これが一番大事であるということです。それを、詩人の坂村真民という方は「念ずれば花ひらく」という言

葉で表現をされました。

「念ずれば花ひらく」。念と言いましても、別段怪しげな念力というような意味では決してありません。心に思い願うことは必ず実現をされてくるということでもあります。このブリット記念ホールにしても、同じでありまして、誰も何も思わない、考えないのに、突然、ここにこの聖心女子大学のブリット記念ホールができあがった、ということはありません。これは学長さまをはじめ、理事の方々や運営に携わる方々の一大決心であろうと思います。大変な決心をして、なんとか学生さんに、あるいは地元の人達に、少しでも多くの人達に学んでもらいたいという、この大学の方々の強い思いが実現をして、それが設計図になり、そして業者の人達が集まり、資材が集まって、そしてこのようにして成り立っているのです。

今日のこの会にしても、そうでございます。何もないところに、皆さん方がたまたま街を歩いていたら、この聖心女子大学に辿り着いた、ということはないのであります。今日は、聖心女子大学でお坊さんの話があるらしい、あんなところで坊さんが何を話すのか、一つ聴いてやろうかというような思いによって、ここにこう集まってきたというわけでございますから、思いというのは全ての大元であります。

それを詩人・坂村真民さんは「念ずれば花ひらく」、一心に強く思い願うことは必ず実現をする、と詠いました。これは坂村真民さんのお母さんが口癖のように唱えていた言葉らしいのであります。詩人の坂村真民さんは、この言葉を少しでも多くの人に知ってもらいたい、という願いのもとに詩をつくられるようになりました。

念ずれば花ひらく

念ずれば

花ひらく

苦しいとき

母がいつも口にしていた

このことばを

わたしもいつのころからか

となえるようになった

そうしてそのたび

わたしの花がふしぎと

ひとつひとつ

ひらいていった

この「念ずれば花ひらく」という詩を坂村真民さんの代表作といってもいいと思います。

そして「念ずれば花ひらく」とともに、もう一つ代表作といってもよろしいのが、「二度とない人生だから」

という詩であります。少々長い詩ですが、直接朗読するのが一番伝わりやすいと思いますので、一度読ませていただきます。

「仰げば、光あり」

二度とない人生だから

二度とない人生だから

一輪の花にも

無限の愛を

そそいでゆこう

一羽の鳥の声にも

無心の耳を

かたむけてゆこう

二度とない人生だから

一匹のおろぎでも

ふみころさないように

こころしてゆこう

どんなにか

よろこぶことだろう

二度とない人生だから

一ぺんでも多く

便りをしよう

返事は必ず

書くことにしよう

二度とない人生だから

まず一番身近な者たちに

できるだけのことをしよう

貧しいけれど

こころ豊かに接してゆこう

二度とない人生だから

つゆくさのつゆにも

めぐりあいのふしぎを思い

足をとどめてみつめてゆこう

二度とない人生だから

のぼる日しむ日

まるい月かけてゆく月

四季それぞれの

「仰げば、光あり」

星々の光にふれて

わがころを

あらいきよめてゆこう

二度とない人生だから

戦争のない世の

実現に努力し

そういう詩を

一篇でも多く

作ってゆこう

わたしが死んだら

あとをついでくれる

若い人たちのために

この大願を

書きつづけてゆこう

こういう詩でありまして、ここに詩人・坂村真民さんの思い、願い、念というものがよく表れております。そして、こういう言葉を普段から口にしていけば、あるいは常に心に願っていけば、少しずつであっても段々とそ

の思いというものが実現をしていくのではないかと思うのです。この詩の中にはたくさんのもが出てまいります。そのどれも一つ一つが詩人・坂村真民さんの世界にとっては大切なものばかりなのであります。

最初からご覧いただきますと、一番はじめに一輪の花が出てまいります。そして、その次に一羽の鳥が出てきます。そして、そのあと一匹のおろぎが出てまいります。そこで、ようやく次に返事を書いてあげる仲間、一番身近な者達が出てまいります。それから、つゆくさのつゆ、そうしてのぼる日、しずむ日、まるい月、かけてゆく月、お日さまやお月さま、そしてたくさんさんの空に輝く星、そして一番最後に、跡を継いでくれる若い人達。これらがそれぞれ登場してまいります。

坂村真民さんは、長い間、四国の愛媛県の宇和島というところで、高等学校の国語の教師をしながら、詩をつくられていた方でもあります。一方で、お若いころから坐禅をなさっていて、ある禅宗の老師といわれる方から「三歳の子どもにでもわかるような詩をつくりなさい」と言われたのだそうです。なかなか三歳の子にもわかるようにすることは難しいのですが、それでも、今読んだ詩にいたしましたし、難しい表現は一つもありません。中学生ぐらいであれば十分に理解のできる、平易な言葉で詠われています。

私どもが普段から学んでおりますお釈迦さまの教えには、最も基本となること、一番肝心なことが三つあると言われています。一つは「諸行無常」といって、全てのものは、あらゆるものは移ろいゆく、変化しているということ。もう一つは「諸法無我」といいます。三番目に「涅槃寂静」といいます。

この教えを友松円諦という仏教の偉い先生が、分かりやすく説明してくれています。「諸行無常」は「全てのものは移ろいゆく」、「諸法無我」というのは「全てのものは一人あらず。一人だけで、その一つのものだけで存

在するものは世の中にはありえない」と表現されておられます。そして「涅槃寂靜」を「己なき者に安らぎあり」というふうに、友松円諦先生は訳されました。あらゆるものは移ろいゆく、全てにものは一人あらず、己なき者に安らぎあり、この三つが仏教の一番根本であると言われております。

しかし、この二番目の「全てのもは一人あらず」は少し分かりにくいと思います。それを、坂村真民さんは「いつもいっしょ」という言葉で表現をされたと私は思っております。「いつもいっしょ」という詩が残されております。「いつもいっしょこれがわたしの信仰理念木とも石ともいつもいっしょ」。

今、「二度とない人生だから」に出てきたさまざまなもの、一輪の花も、鳥も、虫も、それから身近な人達も、つゆくさのつゆも、若い人達も、これら全てが坂村真民さんにとっては、いつもいっしょなのです。自分一人だけということはありません、いつもいっしょにいるんだ、という強い表現であります。「いつもいっしょ」、こういう言葉でしたら、三つの子どもやそれこそ幼稚園の子どもにでも分かるのかもしれませんが。あるお寺でこんな話をしますと、「いい言葉です、いつもいっしょ。うちの幼稚園の子ども達にも、いつもいっしょという言葉伝えたい」というふうに言っておられた方もいらっしゃいました。いつもいっしょ。咲く花ともいつもいっしょ。鳴いている鳥ともいつもいっしょです。

特に、坂村真民さんが愛したのは、野の花であります。特別の珍しい花というよりも、どこにでも咲いているような野の花。その花に、坂村真民さんは何をご覧になったのかというと、こういう詩も残されております。

「何が一番いいか花が一番いい花のどこがいいか信じて咲くのがいい」。信じて咲く。何を信じているのでありましょうか。花ひらく世界、念ずれば花ひらく世界を信じて咲いているのでありましょうか。あるいはこうい

「仰げば、光あり」

う詩もあります。「一輪の花の中に神宿り給う 経典など知らなくていい これだけでいいです」と。一輪の花の中に、神さまが宿っていらっしやる。このことさえ分かれば、難しい経典などは分からなくなたっていい、ここまですぐ切っていらっしやいます。

そして、花とともに大事にされたのが鳥でありました。坂村真民さんは明治42年酉年の生まれでありました。8回目の酉年を迎えて96歳におなりになって、そのときに坂村真民さんは「鳥になります」という言葉を残されました。「鳥になります、今度生まれたら鳥になります」。そのあとに続く言葉がやはり詩人です。「なぜなら、鳥には国境がないからです」と。残念ながら人間の世界は国境というものをつくってしまっています。争いというのも絶えません。しかし、鳥はよい。鳥には国境がないから。国境のない鳥になる。これが詩人・坂村真民さんの最後の言葉となりました。

坂村真民さんはキリスト教にも大変に造詣が深く、マザー・テレサさん、そして聖フランシスコを心から尊敬されてきました。そうして、あの鳥と語るというところが好きだったようでございます。「信仰」という短い詩もあります。「信仰は単純です 一羽の鳥と話が出来たらもう求めなくていいです」と。一羽の鳥と心を通わして話し合うことが出来たならば、もうそれでいいのだ。坂村真民先生はこういう世界を生きた方でもあります。このようにして、この詩の中に、花があり、鳥があり、虫達がいる。虫達に関してこういう詩もあります。「守られて眠っていることを知ってください こんなにもたくさんさんの虫達が鳴いてくれているのですから 星々が輝いてくれているのですから」。一人寝ていると思っても、一人だけではない。周りには虫達が鳴いてくれている。空には星がたくさん輝いてくれている。決して一人ではない。そのように、花、鳥、虫達、お日さま、お月

さま、たくさんのものが出てくるのですが、ここで考えてほしいのでございます。この詩の中に、言葉では表現されていないのですが、真民さんが最も大事にしていたものが表れております。

何が表れているのでありましょうか。私はそれを、光と風だと思っております。真民さんの詩の世界というのは、光と風だと思っております。光というのは、確かに星々の光というところで一字出てきておりますけれども、しかし、この詩の中の全編に光が満ちあふれているのであります。なんとすれば、光がなければ、私達は一輪の花を見ることができません。

そして、風です。空気といってもいいのですが、どうも空気というと味気ないのです。空気はこの空間に最も多く満ちあふれているものです。しかし、私達は普段その空気というものを意識する、感じるということとはほとんどありません。感じるのにはやはり、風となって吹いて来た時でしょう。吹く風であります。私は何かこの詩を読んでいると、心地よい風が吹いてくるような気がするのです。さんと降り注いでいる、あふれる光と、吹いてくる風を私はこの「二度とない人生だから」という詩の中で感じます。また風というと、風の家という井上洋治神父とも、坂村真民先生は深く学ばれていらっしゃいます。風というところで、真民さんは共鳴されたようです。「風」という詩がありまして、「二度とない人生だから」よりも少し長い詩であります、読んでみます。

風

一度通っていったら

二度と帰ってこない

風

風は宇宙の声

冷たい風

暖かい風

人間を

人間たらしめる

風の鞭

風の愛

風は

かなしい者の友

さびしい者の味方

人は幸せになると

風の声が

きこえなくなる

そしてそれを

不思議とも

思わなくなる

「仰げば、光あり」

風は

ふりかえらない

あとをみない

ただ前進するだけだ

風のように来て

風のように去ってゆかれる

だから

如来

如去という

風は

どんな小さい穴でも

吹き抜けてゆく

おのを空にしたものの

すばらしさよ

風には

形などない

あるのは命だけだ

夜明けの風には
特にその命がこもっている
わたしは冬の子だから
春の風を待つ
光と薫りと溢れる命とを
持ってきてくれる
美しい風の子を待つ
長い旅をしてきた風が
ある夜明けわたしに言った
はからいを捨てなさい
すべてを任せて
素直についてゆきなさい
とどまることなく
一筋に歩いてゆきなさい
信が第一ですと
解決できないことは
風に問うたらよい

「仰げば、光あり」

風は親身になって

答えてくれるだろう

かなしいこと

くるしいこと

さびしいこと

たえがたいことなど

ある日風が

露にささやいた

わたしたちを

さぞうらんでいるでしょうね

せつかく美しく光っているのに

散らしてゆくのだから

いいえすこしも

うらんでなんかいません

わたしたちは

玉となった瞬間の喜びで

生きていますから

露たちは

そうさわやかに

こたえるのであった

かすかに吹いてゆく風にも

こまやかな愛がこもっているのを

どんな小さい花たちでも

ちゃんと知っている

この呼応の美しさを

わたしは華厳とよぶ

夜明けの風に向かつて

念ずれば花ひらく

八字十音の真言を唱える

風は無辺にして無限だから

わたしの願いを

地の果て天の果てまで

伝えてくれるだろう

尽十方の諸仏諸菩薩さまも

きつと聞きとめて下さるだろう

長い詩であります。しかし、この長い詩の中で注目をしてほしいのは、風と露の対話のところなのです。「あ
る日風が露にささやいたわたしたちをさぞうらんでいるでしょうねせつかく美しく光っているのに散らして
ゆくのだから」。露が答えるのです。「いいえすこしもうらんでなんかいませんわたしたちは玉となった瞬間の
喜びで生きているのですから」。風と露の対話というのは、まさしく詩の世界でございます。詩人の面目躍如と
いうところでありますように。

露が風に散らされても決して恨んだりはいらない、なぜなら露が、その玉となった喜びがあるからだというので
あります。この受け止め方に学びたいのであります。

もう一つ、最後に味わってほしいのが「幸せの帽子」という詩です。

幸せの帽子

すべての人が幸せを求めている

しかし幸せというものは

そうやすやすと

やってくるものではない

時には不幸という

帽子をかぶってくる

だからみんな逃げてしまうが

実はそれが幸せの

正体だったりするのだ

わたしも小さい時から

不幸の帽子を

いくつもかぶせられたが

今から思えば

それがみんな

ありがたい

幸せの帽子であった

それゆえ神仏の

なさることを

決して怨んではならぬ

この詩の中に出てくる「それが幸せの正体だったりするのだ」。ではその「それ」というのは一体、何でありましょうか。一見、不幸であること、辛いこと、苦しいこと。一見そのように見えても、実はそれが幸せである

「仰げば、光あり」

ということがあるのであります。私達は何か少しでも、自分の思うに任せないこと、不幸なこと、辛いことがありますが、それだけに目がいつてしまいます。最初にご紹介いたしました、「猿跳んで一枝青し」という句を思い起こしてほしいのでございます。猿がぴよんと飛び跳ねただけで、私達はそこだけを見てしまいます。しかし、その周りを取り囲んでいるものは一体何であるのかという、広い大きなところを見る目を持つてほしいと思うのです。そこにむしろたくさんの幸せがあるのではないのでしょうか。

今日の演題の「仰げば光あり」というのは、もともと坂村真民さんの詩の言葉であります。厳密に調べてはいないのですが、おそらく一番短い詩であるといってもいいのではないかと思います。最初に「影あり」という言葉があるので。「影あり仰げば月あり」。これで終わりです。これで一つの詩なのです。「影あり仰げば月あり」。これほどの真理というものはないと思います。影があるということ、月の光があるから影があるのです。光がなければ、影はありません。しかし、私達はその影だけを見つめてしまう。なぜこんなところで、こんな影の中に自分はいるのであるのか。そんなときに、仰ぐ、振り向く、振り返ってみれば光が差している。光が差しているから、影があるのです。それを、一枚の紙の裏と表のようなものだとすることもできません。光と影。闇と光。相反するもの同士が協和し合いながら、この世界というものが成り立っているのであります。真民先生はこういうことも言われております。「光だ、光だという人には、いつか光が差してくる。闇だ、闇だという人にはいつまでも闇が続く」と。これはその通りだと思えます。

こちらの学生の皆さま方も、東日本大震災のボランティアに大変熱心に取り組んで下さっているということを知りました。日本という国は本当にどうしてこんなにも、災害が絶えないのか、今も九州の方では大変な思いを

されている方が大勢いらっしゃいます。私なども微かなことしかできませんけれども、何度か東北にも足を運ばせていただきました。そんな中で宮城県の気仙沼にあるお寺のある和尚さんが、最近こういうことを言われました。そのお寺も、新しくできたばかりの本堂を全部津波で流されて、お檀家の人達、周りの村の人達も、大勢亡くなったのであります。その和尚さんがこう言われました。「震災で私達は多くのものを失った。かけがえのない家族や仲間達、たくさんの財産を失った。しかし、それ以上のたくさんの人々から真心をいただいた」と、こういうことを言われておりました。「仰げば光あり」というのは、こういうことをいうのではないかと思います。

お若い学生の皆さま方も、つまずいたり傷ついたり、人生はその繰り返しでございましょう。しかし、そういう時に、その苦しいところばかりを見つめて閉じこもっているのではなく、ふっと、振り向いてみて下さい。必ず、日が差しております。周りには必ずどこかに花が咲いています。どこかで鳥が鳴いているかもしれません。一人で眠っていると思っても、空に星々が輝いて、見守って下さっています。そういう世界に気が付いてほしいのです。

「お暑いですね」と、こう申し上げました。それも、お日さまが差して下さっている確かな証なのです。お日さまが差して下さっているおかげで、光を感じることができなのです。そういう世界に少しでも気が付くことができましたならば、真民先生が「風」という詩で詠っているように、風のようにどんな困難や辛いことに直面しても、吹き抜けていけるのではないかと思うのであります。

「猿跳んで 一枝青し 峯の松」。満面の雪を見る眼を持ってほしいと思います。眼にいっぱいあふれながら気が

「仰げば、光あり」

付いていない、光や影、あるいは皆さま方がお勉強なさっている神さまの愛、あるいは私どもが学んでいる御仏の慈悲というのも、同じところであろうと私は思っております。

大変長時間にわたりましてご清聴いただきましたこと、ご縁をいただきましたことを、心から感謝いたします。ありがとうございます。